

# シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルタルコスを中心に——

## (Ⅲ)

### 『ジュリアス・シーザー』論 (その三)

#### アントニウスとシェイクスピアのアントニウス像

木 村 輝 平

カシアス

だが、どうも心配だ。  
シーザーに対するあの男の深い愛慕、これが——  
(2.1.183~184)

### (一)

マルクス・アントニウスはクレティクスと仇名された同名の父と、母ユリアの間に前82年頃生まれた。父はあまり有能な政治家ではなかったが、祖父は政界で活躍したばかりでなく、弁論家としても著名であった。若い頃のキケロなども心服したという。ユリアはその名の示すようにカエサル家の出身で、アッピアノスなどはアントニウスをユリウス・カエサルと親せきであるとしているが、<sup>1)</sup> そうだとしてもそれほど近いものではない。

幼くして父を亡くしたアントニウスは母の嫁いだコルネリウス・レントゥルス (P. Cornelius Lentulus) の家で育てられる。若い頃クリオという放縦な人物

### シェイクスピア劇とローマ史の人物像

と親しくなり、野放図な享楽生活を送った後、過激な民衆派の政治家クロディウスとも接近するが、やがて別れてギリシャに遊んだ。前58年から55年まで彼は執政官のガビニウスに従ってパレスチナ・エジプトに遠征し、かくかくたる武勲をあげている。続いて54年からガリアに行き、カエサルの幕僚を務めた。49年にガリアから戻ると、カエサルの後押しでト占官と護民官に選ばれ、彼のいわば代理人としてカエサルの権益を守るために闘う。同年、元老院での闘争が実を結ばず、アントニウスらが追放されると、ここにカエサルと元老院・ポンペイウス派との内乱・抗争が始まる。カエサルがルビコンを渡ってすばやくイタリアを手中にした後、スペインのポンペイウス派討伐に出ると、アントニウスはイタリアの政務を託される。その後、彼はポンペイウスに対峙するカエサルの援軍に向い、ファルサロスの戦いではカエサル軍の左翼を率いた。ファルサロスの後、彼はまたローマに戻り、騎兵長官としてイタリアの政治の責任者になる。前44年にはカエサルと並んで執政官になっている。

アントニウスはカエサルのはえ抜きの部下の中でもっとも有力であり、また有能でもあった。護民官の時にはポンペイウス派に巧妙に対抗し、また軍隊の将としても目覚しい働きを示している。兵士の間でも、その持前の気前よさ、親しみ易さから絶大な人気を得ている。しかし、一方では、彼は度はずれの享楽癖の持主で、酒色に溺れがちであった上、政治にもその無節度ぶりは持ち込まれたので彼の支配を受けた一般市民には好かれなかった。プルタルコスの内乱時にカエサルの留守を預ったアントニウスの統治者ぶりを次のように述べている。

要するに、カエサルの支配が嫌われるようになったのは、カエサル自身では独裁者とならなかったのに、彼の下で横暴、無法に支配した彼の友人たちのせいであった。中でもアントニウスはもっとも有力者でありながら、最大の科を犯し、最大の非難に晒した。

(『アントニウス伝』6節)

## シェイクスピア劇とローマ史の人物像

またフェルサロスの戦闘の後で、カエサルが残敵掃討に出かけて後を任された時も同様であって、ドラベルラと争いを起こし、市民をないがしろにしてゼいたくにふけた。しかし、カエサルはそれでもアントニウスをうまく操縦して、役に立てた。プルタルコスによれば「カエサルはアントニウスの愚昧と横暴をかなり矯正した<sup>2)</sup>」という。考えてみると、カエサルの部下にはアントニウス同様の、異色の放蕩児の人脈がある。護民官の時に買収されてカエサル派に投じたクリオもそうであるし、一時カエサルの手先となったクロディウスもかなりいかがわしい享楽家であった。この男はカエサルの家で行なわれた祭式にまぎれてカエサルの妻のところに忍び込もうとしたことがあったが、カエサルは妻は離別したものの、民衆の間で絶大な人気であったこの男を敵に回さず、手なづけて利用した。(この時、カエサルがその矛盾を問われて「カエサルの妻たる者は不名誉な嫌疑を受けることがあってはならないからである」と答えたことは有名である。)カエサルにとって清濁合わせて飲むことは容易だったが、おそらく濁の方が扱いやすいということもあっただろう。

また、アントニウスのような人物はタイプとしてカエサルには安心できたことも事実であろう。前々回にも触れたが、プルタルコスはカエサルが暗殺の陰謀に関して、「心配なのは肥って髪をキチンとしたあの男たち〔アントニウスとドラベルラ〕ではなくて云々」と言ったとしているが、<sup>3)</sup>これはおそらく享乐的で現実的で陽的な彼らの性格がカエサルにはよくわかっていたことを示しているよう。

カエサルの晩年には、アントニウスはカエサルと並ぶ執政官に任ぜられているが、当時もカエサルの忠勤に大いに励んでいたことはルベルカーリア祭での例の王冠の件でも明らかである。またそれと同時にこれまでと同様遊興にも励んでいたことも間違いないであろう。その点はシェイクスピアも忘れずに劇に描き込んである。

## シェイクスピア劇とローマ史の人物像

シーザー ……

見るがよい。夜遊び好きのあのアントニーも  
元気に起きている。おはよう、アントニー。

(2.2.116~7)

ここでアントニーの放蕩を温かく見る目はシーザーのものであると同時にシェイクスピア自身のものであると言ってよいような気がする。因みに、直接的にこのセリフの土台となったのは、たぶん『アントニウス伝』9節の次のような箇所であると思われるが、これは良くも悪くも、アントニウスの生活ぶりをもっともよく伝えているところのひとつだろう。

……一方、キケロも言うように、彼は貴族たちに嫌われたばかりでなく、彼のだらしない生活の故に憎まれもした。というのは人々は彼が時をわきまえない宴会やドンチャン騒ぎを開いたり、軽薄な人妻たちに金を浪費したり、真昼間に眠ったり、二日酔をさますために街を歩き回ったりすることを憎悪したからである……。

### (二)

カエサルが暗殺された時、アントニウスはトレボニウス (Gaius Trebonius) に議場の外に引き留められていて何もできなかった。中で何が起きたかを知ると、彼は奴隷の服に着換えて逃げ去ったという。トレボニウスの行動は計画通りのものであったが、彼とアントニウスの間にはカエサルの暗殺計画をめぐる面白いエピソードがあったことがプルタルコスによって伝えられている。(『アントニウス伝』13節) すなわち、カエサルがスペイン戦役から帰国するので皆が遠くまで彼を出迎えに行った時、トレボニウスはカエサル暗殺についてアントニウスにそれとなく探りを入れてみたことがあった。アントニウスはそれを察したものの、それには耳を借そうとはせず、また他方、カエサルにはその事を

### シェイクスピア劇とローマ史の人物像

告げずトレボニウスへの信義を守ったという。この話はブルトゥスやカッシウスらが、カエサル暗殺計画にアントニウスを加えるかどうかを論じた時、トレボニウスが皆に披露したものだが、その後ではアントニウスを一味に誘わないのは当然のこととして、逆に、彼をカエサルと一緒に暗殺すべきかどうかが議論されたという。(シェイクスピアはこのエピソードは省略している。ただし、暗殺者たちがアントニーの処置を論じた時、トレボニアスが「あの男は恐れるに及ばない。生かしておこう。/彼は生きながらえては、この事を笑いとばすような男だから」と言い、ブルタスと共にアントニーの助命を主張するのは、上のエピソードに何らかのヒントを得て書かれたものとも考えられるのである。)

暗殺は成功したものの、ブルトゥスらの一味はそれ以後の具体的な方策は立てていなかったらしく、民衆に演説してみても彼らが期待していたような熱狂的な支持は得られなかった。一方、アントニウスと、軍を掌握していたレピドゥス (M. Aemilius Lepidus) の側も元老院の意向を考えて相手をつぶす決定的な行動に出ず、いわば両すくみのような状態になった。

すべては、アントニウスが招集した17日の元老院の成行きにかかっていたが、その席で暗殺者たちの赦免が決議されるとともに、これまでのカエサルの決定、法令が有効とされたことで、事態は収拾に向かう。この時アントニウスは危険で困難な情勢をたくみに処理したものと見られ、名声を上げた。なお、プルタルコス<sup>4)</sup>の伝(『ブルトゥス伝』20節)によれば、遺言の公表と公葬の許可を得たのはアントニウスの力によるものとされているが、この点は記述が不正確で、実際はカエサルの義父のピソ (L. Calpurnius Piso) の努力によるものらしい。

もちろん、シェイクスピアはこれらの経過をプルタルコスの中に見出したはずであるが、劇ではごく簡単にまとめている。劇中では、アントニーはブルタス、カシアスのところに使者を立てた後で自から姿を現わし、シーザーの遺

骸の傍らで彼らと——もちろん、表面的なものでしかないけれども——和解することになっている。ブルータスが退場して一人後に残ったアントニーはその遺骸に復讐を誓い、来るべき戦乱の災禍を予告する。

以上の筋は単純で、史実とは似ても似つかないが、アントニーの政治的手腕、機略らしきものも伝わって来るし、また悲憤と妥協のディレンマに悩む姿もよく描かれている。

ただ、事実としてアントニウスが暗殺者たちに対してこのように激しく憤り、復讐心を燃やしたものかどうかはわからない。プルタルコスには手がかりとなる記述はないが、アップיאノスによれば、暗殺の直後、レピドゥスとアントニウスが対応策を協議した際に復讐の可能性も考えたことになっている。しかし、同時に、それがカエサルへの愛着からか、彼らが誓った（つまり、カエサル警護の）誓約故にか、あるいはまた一時に多くの高官を片づけられればそれだけ彼らの権力達成が容易になると考えたためかはわからないとしている。<sup>5)</sup>

じっさい、アントニウスが権力を欲していたことはその後の彼の行動でも明らかであるし、またカエサルの生存中も、パルティア遠征でカエサルがローマを留守にする間、権限を一手に収めようとドラベルラを排斥し、争ったことからわかる。

さらにまた、アントニウスはカエサルの死後間もなく、カエサルの妻カルプルニア (Calpurnia) から遺された財貨と書類を手に入れたが、アントニウスは書類は都合のよいように改変し、財貨も私して、カエサルの遺志を無視したことは、アントニウスのカエサルへの忠誠心が必ずしも純粋なものではないことを示しているだろう。しかし、それでも、アントニウスがカエサルの死を深く悲しみ、報復を誓うことは人間の心理としてはたぶん可能であり、後世が実状を窺い知ることは難しいことである。

ともあれ、この劇でシェイクスピアは問題を単純に割切っているようであり、

### シェイクスピア劇とローマ史の人物像

三幕一場の独白の場面ではアントニーは純粹にシーザーの死を憤り、復讐を希求する。そこでなされる、来たるべき災禍の予言はローマ史の世界とは縁の薄い、すぐれてエリザベス朝演劇的な産物と考えるべきであろう。しかしまた、そのセリフの中にはシェイクスピア独特の冴えが見られ、いわばシェイクスピア的瞬間が生じている部分があると思う。これがうまく表現できるかどうか疑いしながら、試訳を掲げておくことにしたい。

……

流血、破壊が日常茶飯とされ、  
恐ろしい光景が当り前になり、  
赤子が兵士の手で切り裂かれても、  
母親はただニコリ笑うだけ、  
残酷な行為に慣れて、あらゆる  
憐れみが麻痺することだろう。  
シーザーの亡霊は復讐を求めてさまよい、  
地獄から飛び来ったエイテを従え、  
この国土に「殲滅」と号命を發して、  
戦さの犬どもを解き放つだろう。  
この悪事が埋葬を求める人々の腐臭で  
地上に知れわたれとばかりに。

(3. 1. 265~275)

### (三)

『ジュリアス・シーザー』三幕二場で暗殺の正当性を主張するブルータスの弁明と、それを巧妙に逆転して、大衆の支持を自分の側に引き寄せてしまうアントニーの演説はいわば雄弁のお手本として有名であり、一般によく知られているので、史実がこの場面のものであったという錯覚を抱きかねない。しかし、

実際の有様はこれとはやや違っていたようだ。

この事件は、プルタルコスでは、『カエサル伝』68節、『ブルートゥス伝』20節、『アントニウス伝』14節、『キケロ伝』42節で扱われているが例によってかなりの異同がある。

まず『カエサル伝』によると、民衆が興奮し、暴動を起したのはカエサルの遺言で、ローマ市民一人一人にかなりの金銭が贈られていることがわかり、「ひどく傷を負った遺骸がフォルムに運ばれて行くのを見た」時であることになっている。ところが『キケロ伝』では、さらに、これに加えてアントニウスが「剣でズタズタに切りきざまれた血まみれのカエサルの外衣を示した」ことになっている。これだけではアントニウスの演説は出番がなかったことになってしまうが、上の部分はいずれも叙述を端よったため生じた不正確さによるもので、プルタルコスの真意は『アントニウス伝』の記述や、次に示した『ブルートゥス伝』の記述にあると考えるのが自然であろう。

その後カエサルの遺体がフォルムに運ばれると、アントニウスはローマの昔からの習慣に従って故人を称揚する追悼弁論を行ったが、自分の言葉が人々を動かし、悲しみに駆り立てているのを見ると、さらに人々を煽り立てるように演説し、カエサルの血まみれの外衣を取り上げると、一々その上の傷を示しながら皆の前に拡げた。こうなると人々は怒り狂って騒ぎ出し、もはや秩序は保てなくなった……。

(『ブルートゥス伝』20節)

以上のように、プルタルコスによれば、カエサルの葬儀の際にブルートゥスが姿を現わして演説をしたということはなく、アントニウスと弁論の戦いをしたわけでもない。このことについての記述は他の史家も同じであって、『ジュリアス・シーザー』のアントニーとブルータスの舌戦という設定がシェイクスピアの創作であることは間違いない。しかし、ブルートゥスが暗殺の後、カピトリウムやフォルムで自分たちの行為の意義を人々に説いて敬服の念を起こさ

### シェイクスピア劇とローマ史の人物像

せたことは、他の史家と同様、プルタルコスにも述べられているので、シェイクスピアはこのこととアントニウスの追悼演説を一緒にしてより劇的な構成にしたのであろう。

さて、アントニウスの方はプルタルコスの伝えるように、カエサルの葬儀に出席して、これを取り仕切る主役であったことは確かだが、どんな風に演説をしたかについては異伝もある。スエトニウスによると事実はかなり平凡であったことになる。

マルクス・アントニウスは公式の追悼の辞を取り止め、そのかわり彼は式部官に命じて、まずカエサルに神と人に与えられるすべての榮譽を与えるという最近の法令と、ついで、元老院の者すべてが彼の身の安全を図るという誓いを読み上げさせた。アントニウスはただ短い説明を付け加えただけであった……。

(『ユリウス・カエサル』84節)

アントニウスの狙いは人々のカエサルへの裏切りを強調することにあっただけだが、スエトニウスによると、民衆が暴動に走ったのは葬儀の後になっており、特にアントニウスの弁舌と直接的な因果関係があった風には感じられない。

このままでは、プルタルコスとスエトニウスのどちらが真実なのか迷ってしまうが、実は両者はどちらもほぼ正しく、互いに補うような関係にあるようだ。アッピアノスの詳しい叙述によると、上の両者はうまく統合され、アントニウスがスエトニウスの言うような戦法を取ったのは最初の段階であって、それ以後はカエサルの遺体を前にして、プルタルコスの伝えるように、というよりはそれ以上に激しく、民衆の憤激を煽った<sup>6)</sup>ということになる。アントニウスの政敵であったキケロも、民衆を煽って暴徒に変えたのは葬式でのアントニウスの演説の故であると非難しているので(『第二フィリッピーカ』36節)、アントニウスの煽動演説は間違いない事実であろう。これによってすぐ暗殺に加わった者

### シェイクスピア劇とローマ史の人物像

がローマを追われたわけではないが、彼らにとって情勢が決定的に不利になったことは確かであり、やがてはローマを離れざるを得なくなる。

アントニウスの弁論の内容はディオがかなり詳しく紹介しているほか、アッピヤノスも概略を伝えているが、<sup>7)</sup>両者はあまり一致しているとは言えないし、どれだけ信頼を置いてよいのかは難しい。プルタルコスには内容に触れていないが、『アントニウス伝』2節では、アントニウスが青年時代にギリシャに渡って弁論の練習をしたことが述べられ、「彼はアジア風と呼ばれる修辞法を用いたが、これは当時もっとも洗練され、もっとも名声を博したものであり、派手さと驕慢と虚勢に満ち、アントニウスの生活様式に類似していた」とある。

シェイクスピアがアントニーの演説を書く上ではたしてこのところまで気を配ったのかどうかは、どちらとも言いかねる微妙な問題である。もちろん、ブルータスの理詰めスタイルと、アントニーの修辞の曲を尽したスタイルははっきりと区別されていることは確かだが、アントニーの演説をアジア風と呼ぶには少しためらいがあるろう。

アントニーとブルータスの弁論の場面成立について、関連はより間接的になるが、もうひとつ重要な要素がプルタルコスにあると思われる。それはプルタルコスには弁論の妙を示す、印象的な話が少なくなく、これがプルタルコスを読む楽しみのひとつともなっているということである。もちろん、『キケロ伝』と、これに対照された『デモステネス伝』には弁論の話題が大きな割合を占めているが、その他にも弁舌の力で状況を逆転したり、苦境を逃れる話はあちこちに見られる。

ここではカエサルに関係があるものを一、二紹介しておくことにする。まず、ひとつはカティリーナ (L. Sergius Catilina) の陰謀事件に関するもので、この話は『キケロ伝』10—23節に詳しいが、『小カトー伝』22, 23節および『カエサル伝』7, 8節にもあるからシェイクスピアの目に触れたことは間違いない。

それは概略次のような話である。

キケロが執政官の頃、カティリーナとその一党は不安定な政治情勢に乗じて権力の獲得と国政の改変を狙っていたが、ついに騒擾と内乱によってこれを実現しようと図る。計画は事前に発覚し、陰謀は防がれるが、その時捕えられたレントゥルスとケテグス (Cethegus) など一味の者の処罰が問題となり、これがキケロの主宰によって元老院で議せられた。<sup>8)</sup>各議員が次々に意見を述べたが、最初は先頭のシラヌスが述べた死刑に処すべしという主張が皆の支持を得ていた。ところがカエサルの番になると、彼は非常な雄弁を揮って身分のある人々を裁判もせずを殺すことは不当であることを説き、逃亡したカティリーナが戦争で降服するまで彼らを監禁しておくことを提案した。この演説に動された多くの人々はカエサルに同調し、以前に意見を述べた人たちも前言を翻えし、カエサルに賛成した。しかし、カトゥルス (Lutatus Catulus) と小カトーの二人はあくまでもこれに同意せず、カエサル自身の嫌疑をも指摘して、激しく反対した。その結果、情勢は再度逆転し、レントゥルスは元通り死刑に処せられることになるのである。

もうひとつの話は、この雄弁家のカエサルがキケロの弁論に圧倒されて呆然自失するというもので、『キケロ伝』39節に語られている。

……さらに、次のようなことが伝えられている。クイントゥス・リガウスがカエサルに敵対してきたことで告発された時、キケロがその弁護を引き受けたが、その時カエサルは友人たちに、あの男は悪人で私の敵でもあり、有罪は確実なのだから、久しぶりにキケロの弁論を聞いても差しつかえなからうと言った。しかし、いったんキケロが演説を始めると、それはカエサルをひどく感動させ、言葉には非常な品位と力があって、カエサルはさまざまに顔色を変え、その顔色から彼が全身に大きな嵐を経験していたことは明らかであった。ついにキケロがファルサロスの戦いに触れた時、カエサルは感情の高まりに抗し切れず、全身を震わせ、持っていた書類を取り落した。そして結局、意に反してリガウスを放免しなければならなかったのである。

『キケロ伝』の中でも、この箇所が天才的弁論家キケロの姿をもっともほうふつとさせているように思われる。

(四)

『ジュリアス・シーザー』ではアントニーの煽動が成功した後で、次の場面はアントニー、オクティヴィアス、レピダスの三人の間で三頭支配が成立し、それぞれの政敵を抹殺するためのいわゆるプロスクリプション（追放<sup>9)</sup>の場面になっている。しかし、実際にはこのふたつの出来事の間には約一年半の経過があり、3人の関係も紆余曲折を経ていたのである。

共和派の主な人物が地方に去ってしまうと、アントニウスは自己の官職やカエサルの残した書類や財貨、そして護民官の実弟などを利用し、持前の横暴さで独裁者のように振舞いはじめ、また、勢力を伸ばしてきたカエサルの相続人オクタウィアヌスと対立する。大きな政治勢力を持っていたキケロはアントニウスのやり方を憎み、元老院を説いてアントニウスを国家の敵と決議させ、オクタウィアヌスと組んでアントニウスに対抗した。元老院、オクタウィアヌスの軍とアントニウスの軍は北イタリアのムティナの近くで会戦し（前43年）、アントニウスの側は敗北を喫する。この後、逃走中に彼は幾多の辛酸をなめるのであるが、また同時に、天性逆境に強い彼の真価を発揮するのである。

しかし、彼は不拔の天性を持っていたから、どんな苦境にも耐え、運命が苛酷であればあるほど真価を見せた。（中略）それ故、あれほどの華美とぜいたくに埋れていたアントニウスが泥水を飲み、草の根や木の実を食べたことは兵士のまたとない見本になった。また、伝えられるところでは、アルプスを越えた時には彼らは木の皮を食べ、まだ人が食べたこともないような獣を食べたということである。

（『アントニウス伝』17節）

## シェイクスピア劇とローマ史の人物像

このような彼の特性は、後に彼がローマの東方世界の支配者としてパルティア遠征に出て、みじめな失敗をこうむった際にも発揮されている。

ところでこの後アントニウスは、外ガリアにいたレピドゥスの軍に合流して勢力を盛り返すことに成功するのだが、そこでもひとつの美談を残している。

レピドゥスのところに来ると、彼はすぐその傍に陣を張った。そして彼を助けに誰も来ないのを知ると、あえて自分から出かけて行くことにした。ムティナの敗戦後は彼のひげは伸び放題のぼうぼうであり、髪もそのままであったが、その身を喪服に包んでレピドゥス軍のざんごうの近くまで来た。彼が兵士に呼び掛けると、兵士は彼の姿と言葉に動かされて同情し始めた。これを見たレピドゥスは恐れて、兵士の耳をふさぐためにラッパを吹かせた。しかし、いっそう彼を憐れんだ兵士たちは、ひそかに話し合うため、クロディウスとラエリウスという者を娼婦のなりをさせて送り込み、おもいきって陣営に来ることを勧め、多くの者が彼を歓迎し、もし彼が命ずればレピドゥスを殺すつもりであることを告げた。アントニウスはレピドゥスに手を掛けることは許さなかったが、次の朝軍隊を率いて浅瀬を渡河した。レピドゥスの兵士が手を差し伸べ、杭を抜き、ざんごうを埋めているのを見てアントニウスがまさきき川に入った。アントニウスは陣営に入って全軍を掌握したが、レピドゥスを丁重に扱い、彼を抱いて父と呼んだ。そして、実際は自分がすべてを取りしきり、軍を指揮したが、司令官の称号と名譽は保たせた。

(『アントニウス伝』18節)

アントニウスがレピドゥスを頼ってやって来たのは、レピドゥスは彼の盟友であり、「カエサル許で彼のため便宜を色々図ってやったことがあったから」(上掲箇所)なのだが、レピドゥスはおそらく自己の保身のため友情にふたをしたのであった。他方、アントニウスの方はこれに対する信義を以って報いている。『対比列伝』を読んでいると、ローマ人にはしばしば信義の尊重という美風があることに気付くが、この話もそのひとつで、先のトレボニウスとのエピソードといい、信義に厚いアントニウスの人柄を示すものである。

『ジュリアス・シーザー』ではこの両者はプロスクリプションの場面で会す

### シェイクスピア劇とローマ史の人物像

るのであるが、やや奇妙に思えるのは、アントニーのレピダスへの態度である。そこではアントニーはオクティヴィアスも驚くほど口汚くなり、退場したレピダスを無能なでくの棒と罵る。たしかにプルタルコスの記事の端々から、レピドゥスはアントニウス、オクタウィアヌスに較べればスケールの小さな人物のように思えるが、しかし、このアントニーの態度は先の話から受ける印象にそぐわない。『アントニーとクレオパトラ』でも、レピダスはやや滑稽な小人物にしか描かれていないことを考え合せると、これは結局、シェイクスピアのレピダス観と言ってよいように思われる。

さて、プロスクリプションによってアントニウスは政敵キケロの死を決定したが、これはキケロが彼のやり口に反対したことと、デモステネスがフィリップ二世を弾劾した故事に因んで『フィリップカ』と名付けたアントニウス弾劾の演説への報復であった。彼はキケロの頭と演説を書いた手を切り離して持って来させ、それをフォルムの演壇にさらさせたが、それがはじめて運ばれて来た時、大喜びして笑い出したという。(『アントニウス伝』20節) こうした野卑な残酷さもアントニウスの一面であった。しかし、シェイクスピアはプロスクリプションの場面を軽く済ませており、キケロの迫害のことまでは触れていない。

シェイクスピアが『ジュリアス・シーザー』の中でカエサルについてはあまり好意を以って描いていないことは初回に述べたが、これと親しかったアントニウスについてはその人柄にかなり共感を以って好意的に描いているように思われる。もちろん、時にはマイナスに映る面も描いていないではないけれど、全般的にはこの劇のアントニーは活力、情熱、智謀にあふれる人物という好印象を残す。フィリップポイの戦闘における武人アントニーはさっそうとしているが、そこでも彼にふさわしい大度を見せるエピソードが描かれる。それはブルータスの逃亡を助けようと、自からブルータスの名を名乗り、追手に身を委ねたルシリアス (Lucilius) という人物についてのものである。この人を連れてき

た人たちに彼は次のように言う。

おい、これはブルータスとは別人だ。だが、  
たしかにひけを取る獲物ではないぞ。  
この人を預っておいてくれ——それも大切にな。  
こういう人々は敵より味方に欲しいものだ……。

(5. 4. 26~29)

このセリフはほとんど忠実にプルタルコスの話(『ブルートゥス伝』50節)を追っているが、その話によれば、後になってこの人は死ぬまで忠実にアントニウスに仕えたということである。このエピソードの語るところはたぶん、信義を知る者は信義を知る者を知るということであろう。

(1978年9月)

### 注

- 1) 『ローマ史』、「内乱篇」2巻134節。
- 2) 『アントニウス伝』10節。
- 3) 『カエサル伝』62節、『ブルートゥス伝』8節、『アントニウス伝』11節。
- 4) アッピアノス、前掲書、2巻136節参照。
- 5) 同上、124節。
- 6) 同上、144—146節。
- 7) ディオ、『ローマ史』、44巻36—49節。アッピアノス、前掲書、144—146節。
- 8) この後、キケロの命令でアントニウスの育ての親レントゥルスは死刑に処せられたが、プルタルコスはこれがアントニウスのキケロに対する激しい敵意の原因であるとしている。(『アントニウス伝』2節)
- 9) 正確には、追放というよりは法のらち外に置くことであろう。